

# サン・トメ島——ポリフォニック・クレオール輪郭

寺尾智史

## 0. はじめに——ギニア火山列島へ

2014年は、ギニア湾が騒がしい年であった。

一つは、ギニア・コナクリ、シエラレオネ、リベリアで猖獗を極めたエボラ熱。もう一つは、ギニア湾の東から南に曲がるコーナーを過ぎて、そのエボラ熱が飛び火しそうになった、ナイジェリアでのボコ・ハラムの跋扈である。

そのギニア湾に、見落とされそうな小さな島々が、4つ、飛び石のように浮かんでいる。

これらはすべて火山島で、アフリカ大陸のカメルーンから北東—南西方向に続く、ギニア火山列の海底火山が海面から頭を出した島々である。

ギニア湾でも、特に湾曲しているニジェール川河口の三角州より東の部分はボニー湾、もしくは——1967～70年のナイジェリア内戦を彷彿とさせる——「ビアフラ湾」とも呼ばれるが、その湾奥から一つ目に最大の島、ビオコ Bioko 島がある。2018平方キロ、済州島より一回り大きく、沖縄本島のほぼ倍の広さである。ポルトガル人に発見されて以来、ブラジルの統治を確認させる代償として1778年にスペインに譲渡されて以降も、1968年の独立までフェルナン(ド)・ド・ポー Fernando do Pó 島と呼ばれた。この島の北端には、産油国、そしてその資源に依存し、それを独占する一族による独裁国家として知られる赤道ギニア共和国の首都マラボ Malabo がギニア湾を見渡すように座する。なお、その島は以下続く火山列島のうちで唯一、ポルトガル人が到着する前から住民がいた島である。彼らはブビ人と呼ばれており、バンツ系系のブビ語を話す。13世紀頃、同じくバンツ系系のファン語を話すファン人による迫害を恐れ、アフリカ大陸から離れ、この島を新天地としたらしい。しかし、植民地主義のいたずらで、同じスペイン領として組み込まれた赤道ギニアの大陸側の地域、リオ・ムニ Río Muni (以下、「リオムニ」)の多数派がファン人だったことにより、植民地時代からファン人が流入、独立後はリオムニを含めて大統領選挙が行われるため、首都がビオコ島側にあるにもかかわらず、人口比率で圧倒しているリオムニの多数派ファン人が政権をはじめとする利権を独占する政治構造となっている。

この他、ナイジェリア内戦で「ビアフラ共和国」独立闘争の担い手となったイボ人、イビビオ人を中心とするナイジェリアからのプランテーション農業労働者であるニヘリアノス Nigerianos、そして数は少ないが自らを混血だと自認し、クレオールを話すフェルナンディノ Fernandino、スペインからのフランコ独裁期を中心とする移住者の子孫——彼らに特徴的なのは、アラゴン地方北東端、アラゴン語域であるベナス(ケ) Benas(que)を源郷とする者が多いことである——などが居住する、多文化の島である。

次の飛び石はプリンシペ Príncipe 島である。136平方キロ、壱岐ほどの広さのこの島は、1919

図1 ギニア湾地図<sup>1)</sup>

年5月29日の日食観測によってアインシュタインの相対性理論が証明されたことで物理学者や科学史家には知られているが、他の機会で歴史の脚光を浴びたことのない、カカオ・プランテーションの島である。後述するように、住民はモンコー Moncó と呼ばれる。

3番目の島は、サン・トメ São Tomé 島（以下、「サントメ島」）である。854平方キロ、すなわち佐渡島と全く同じの広さを持つこの島は、2番目の島プリンシペ島と共に、「サントメ&プリンシペ共和国」というカリブ海ばりのミニ国家を形成している。

最後の4番目の島は、アノ・ボン Annobón（以下、「アノボン島」）、すなわち、1471年の年末から次々に「発見」された列島の最後に、1473年の「正月」に見つかった、という名前を付されている島である。17平方キロ、生月島ほどの小さな火山島は、歴史の偶然で、というより気まぐれな植民地主義の成り行きとして、サントメ&プリンシペ共和国ではなく、1番目の島ビオコ島の国、赤道ギニアに属する。

この4つの火山島列は、その規模と気候風土において、大西洋の向こう側、小アンティルのそれをミニチュアにしたような存在である。黒人奴隷を用いたサトウキビ・モノカルチャーのパイロット・プラントになった意味では、同じアフリカ沖のカーボ・ヴェルデ諸島やマデイラ島に似てはいる。しかし、これに加えて、熱帯雨林に覆われる傾斜のきつい山腹を、奴隷を用いて切り開くさまは、これらの島々を小アンティルにオーバーラップさせる。

本稿では、その対象をこれらの4つの島のうち、真ん中の2島、すなわち、サントメ&プリンシペ共和国という小島嶼国をなすサントメ島とプリンシペ島に絞る。さらに、その面積でプリンシペ島の6.3倍、人口にして23.8倍<sup>2)</sup>に及ぶサントメ島に中心を据える。

## 1. サントメ島につどう人々——6つのことばの根

サントメ島の住人は、ギニア湾沿海、特に現在のベニン、ガボン、両コンゴ、アンゴラから連行されたアフリカ大陸出身の奴隷の子孫たちが中心とされる。サントメ島で生まれた住民の特徴的な区分には、ありきたりの〈黒人〉、〈白人〉、〈メスティーソ（混血）〉の他に、「フォロ Fôro」, 「モンコー Moncó」, 「トンガ Tonga」, 「アンゴラール Angolar」 という4つの俗称で呼ばれるグループ分けがある。

これら4つの俗称は、俗称でありながら、非常に科学的であり、〈 〉で括ったあやふやで状況によってたやすく変動する人種観的区分より正鵠を得ている。

まず、「フォロ」は、1876年に出された奴隷解放令によって解放されたサントメ島の解放奴隷の子孫たちである。

一方、「モンコー」は、北隣の島で、サントメ&プリンシペ共和国の一方の島になっているプリンシペ島出身者およびその子孫である。「トンガ」は、奴隷解放令以降にサントメ島に連行された、非合法奴隷または使用人である「セルヴィサイズ Serçais」の子孫である。これらの人々は、決してまともとはいえない労働使役契約によってカーボ・ヴェルデ、モザンビーク、アンゴラといった、旧ポルトガル領のアフリカ各地から連れてこられ、プランテーションでの苦役を余儀なくされた。そして、最後のサントメ島南部に住む「アンゴラール」については、後にさらに詳しく述べたい。

以上の4つのグループは、当然ながら異なる言語生活を送っていた。そしてこの4つとも、差異が認められる「それぞれのクレオール」を母語として話してきた。義務教育がかなり浸透し、「センサス識字率」が90パーセントを超えた現在でも、その差異は明確に残っている。これに、若干の「ヨーロッパポルトガル人」の子孫、そして彼らより実数はよほど多いと思われる赤道



図2 フォロが表示されている例  
首都サントメの国立高等学校にて。Ke mese は、「職員（教員）室」の意。  
(2014.8. 寺尾智史撮影, 写真以下同じ)

表1 サントメ&amp;プリンシペ民主共和国の県(Distrito)、県庁所在地、人口(2012年)、面積、人口密度(2012年)、10歳を超える住民の言語別話者割合(1981年)

県	県庁所在地	人口 (2012)	面積 km <sup>2</sup>	人口密度 人/km <sup>2</sup> (2012)	ポルト ガル語 を話す (%)	サントメ・ クレオール (フォロ) を話す (%)	プリンシペ・ クレオール (モンコー) を話す (%)	その他 の言語 を話す (%)	
サントメ (北東部海 浜首都圏)	Água Grande アグア・グラ ンデ	São Tomé サントメ	73,091	16	4,568.2	97.0	94.8	1.8	7.6
(東部海浜)	Cantagalo カンタガーロ	Santana サンターナ	18,194	119	152.9	97.3	78.4	1.3	22.1
(南部海浜)	Caué カウエー	São João dos Angolares サン・ジョ アン・ドス・ アングラー レス	6,887	268	25.7	89.6	78.8	0.5	17.9
(西部海浜)	Lembá レンバー	Neves ネーヴェス	15,370	229	67.1	86.6	71.3	0.9	24.0
(北部海浜)	Lobata ロバータ	Guadalupe グアダルー ペ	20,007	105	190.5	94.4	78.5	0.5	21.8
(中央部, 山岳地帯)	Mé-Zochi メ・ゾシ	Trindade トリンダー デ	46,265	122	379.2	94.7	97.7	0.7	7.1
プリンシペ	Pagué パゲー	Santo António サント・ アントニオ	7,542	142	53.1	97.7	71.7	24.6	37.2
農村地域小計						94.0	80.5	2.7	17.5
総計			187,356	1001	187.2	95.0	85.4	2.4	14.0

ギニア共和国で打ち続く独裁制から逃れた、マラボ島、アノボン島およびリオムニの人々を合わせて、900平方キロに満たない島に少なくとも6つの「言語多様性をつかさどる根」があるということになる。

話者についての調査は、センサスを含めてわずかであるが、1981年のセンサスには使用言語についての調査項目があったので、これをもとに表にまとめる。

さらに、大雑把な概数として、次の数字を挙げておく。

【表1】において明らかなのは、解放奴隷の子孫フォロが母語として話すフォロ語、すなわち、サントメ・クレオール語が、サントメの言語生活における多数派を占めている一方で、過疎地で「その他の言語」を話す割合が漸増することである。【表2】の第二位言語であるファン語は、カメルーン南部沿岸部からリオ・ムニ(赤道ギニア大陸部)を経てガボン北部に至るギニア湾沿岸部にかけて話されるバンツ語の一つであり、主に赤道ギニア共和国からの政治難民・

表2 2001年時点のサントメ・イ・プリンシペ民主共和国母語話者人口推計

母 語	推計人口	人口比 (%)
サントメ・クレオール語 (フォロ語)	110,000	81.8
ファン語 [バンツ系アフリカ大陸言語]	12,900	9.6
アンゴラール語 (ンゴラ語)	5,000	3.7
プリンシペ・クレオール語 (ルングイエ語, モンコー語)	4,000	3.0
総人口から上記4言語母語人口を除いた数 (ポルトガル語およびその他の言語)	2,580	1.9
総 計	134,480 (2001年)	100.0

経済難民によって話されていることを考えると、都市部の言語と考えていいだろう。ということは、【表1】の農村部、すなわち首都サントメ市以外における「その他の言語」とは、アンゴラール語か、もしくはロッサス Roças と呼ばれるカカオやコーヒーのプランテーション畑で働く農業労働者として連れてこられた「セルヴィサイス」の移入したこととなる。セルヴィサイスの持ち込んだ言語のうち、アンゴラやモザンビークのバンツ諸語は、フォロ語と大きく異なるため、継承の難易度が高いといえる。他方、カーボ・ヴェルデ人の持ち込んだ母語、すなわち、カーボ・ヴェルデの多様なクレオールは、フォロと語彙、そして統語で似通うところがあり、相似が消滅の引き金を引く可能性を高める場合もある一方で、継承されるうえでより容易であることも事実である。

事実、カーボ・ヴェルデとサントメは人の流れが紡ぐ文化で強く結ばれている。

カーボ・ヴェルデのクレオールでうたわれる唄に「モルナ」というジャンルがあるが、そのモルナの最も著名な歌手であるセザリア・エヴォラ Cesária Évora (1941-2011年)の看板の曲が、「ソダーデ Sodade」、ポルトガル語でいえば「サウダーデ Saudade」である。この曲は、カーボ・ヴェルデ諸島最西端の「音楽の島」とも呼ばれるサン・ニコラウ São Nicolau 島出身のアルマンド・ゼフェリーノ・ソアレス Armando Zeferino Soares (1920-2007年)によって作られた<sup>(3)</sup>。彼が2000年に語ったインタビューによると、1950年代、契約農業労働者「セルヴィサイス」としてカーボ・ヴェルデからサントメ島に、旅立つ友人たちに贈った哀別の歌であった。この曲の第一連では、

Quem mostra' bo  
 Ess caminho longe? (x2)  
 Ess caminho  
 Pa São Tomé

「誰があんたにこの長い道のりを世話してんだい?、このサントメへの道のりを」と歌われる。無論、サントメでも愛唱されている。

ヨーロッパでチョコレートの食文化が定着し、サントメ島にココア・ブームがおこった19世紀中盤には、サトウキビ・ブームによって移民が連れてこられた16世紀以来、久しぶりにこの



島がにぎわうこととなったが、1876年の奴隷解放等によって、ココア栽培を維持する人手が圧倒的に不足した。これを補完したのがセルヴィサイスであるが、その労働環境は過酷で<sup>(4)</sup>、イギリスにおけるチョコレート製造業で最大手であったキャドバリーの社長ウィリアム・キャドバリー William Adlington Cadbury (1867-1957年)は、サントメの状況を視察して衝撃を受け、その状況を Cadbury (1910) で告発するとともに、サントメ島からのカカオ豆購入をボイコットするに至っている。Sodade で歌われる「世話したんだい」という響きには、故郷から遠く離れなければならない、かつ、過酷であるセルヴィサイスという労働形態を周旋してくる人間や運命(神)への恨み言が込められているように思える。

## 2. アンゴラール語とその周辺

【表1】において「その他の言語」にカテゴライズされていることばの一つで、【表2】において人口的に第3言語とされているのが、アンゴラール語である。

ひとめ一目見て、対岸アフリカの「アンゴラ」を想起させる名を持つ、この言語はどのようなことばなのであろうか。

アンゴラール語の発祥については、2つの「語り」がある。それは、「ルーズ・トロピカリズムからの語り」と「ポスト・コロニアリズムからの語り」である。

まず、「ルーズ・トロピカリズムからの語り」について。サントメが独立するまで、Almeida(1956a,b)をはじめとして、主にポルトガルの民族学者たちは、このことばが、どうして首都サントメ市で話されるクレオールと違うのかについて、18世紀からある宣教師などの記述をトレースしながら次のようなストーリーで説明してみせた。

奴隷船は、奴隷を〈載せて〉、アフリカの港を発った。ギニア湾を北西に、はるかアメリカの地に向かったその船は、サントメ島にさしかかった時、猛々しい時化<sup>しげ</sup>に襲われた。船は難破し、何とか船から抜け出せた奴隷たちは、目の前に出現した島礁に泳ぎ着いた。ヨーロッパから来た島の支配者たちが関心を寄せない、山がちな南東部のその狭い磯辺で、今日まですなどりの民として生きてきた。彼らのことばは、もともとアフリカのことばだったが、サントメのまちの人たちとゆっくりと接することで、そのことばを少しずつ取り入れ、アフリカのことばとも、サントメのことばともちがう、いまのことばになった。

しかしながら、「ポスト・コロニアリズムの語り」すなわち、このコミュニティのことばに関心を寄せる、サントメ独立後の研究者たちのアンゴラール語成立にかかわる推論は、これとは根本的に異なる。

アンゴラール語は、クレオール語学の中では、コロンビアで話されるパランケーロ Palanquero などと並んで「マロネージ・クレオール」、すなわち、「逃亡奴隷クレオール言語」の一典型とされている。この説はまさにポルトガルの独裁体制<sup>たお</sup>が斃れたタイミングで、Ferraz (1974:180) によってはじめて提示されている。

つまり、サントメに連れてこられたギニア湾南部出身のアフリカ人奴隷——その大部分はサ

トウキビ栽培に酷使された——の一部が、数次にわたって逃亡し、当時、追手が陸路からは近づけなかったような島の南東部に定住した。彼らのアフリカ大陸における出自は、19世紀になって解放されたサントメ市の奴隷たちと大差ないが、逃亡後の地理的隔離によって、ポルトガル語をはじめとするヨーロッパ諸言語との継続的接触を遮断され、より古い形、すなわち、彼らの元来の出身地であったギニア湾南部のバンツー系言語の痕跡をより多く残存させるクレオール、すなわちアンゴラール語を話しているというものである。

どちらが「ただしい」のか、その判断を下す客観的材料は、書記資料がほぼない——それは、話し手が識字の外であったことばかりでなく、植民者であるポルトガル人の書記リテラシー自体、さらには「歴史リテラシー」が低く、「記録すること」に無頓着であったことにもよる——なか、言語学者は、今や相互には意思疎通のできない二つのクレオールを並べて、その「記述言語学的」共通点——特に統語におけるバンツー性の同根ぶり——で証明しようとしている。また、あまり豊富とは言えない植民者側の史料で、16世紀の奴隷逃亡率を割り出し、この推論の確からしさを示す研究もある [Seibert (1998)]。

さらには、Lorenzino (1998) のように、アンゴラール語は、追手に内容を知られる可能性があるサントメ・クレオール語をわざと改変して、わかりにくくしたものだという推論を立てる言語学者もいる。

他方、Seibert (1998) は、独立した当時には、主に独立を勝ち取ったサントメ市のフォロ人知識層を中心に、アンゴラール語の母語話者、すなわちアンゴラール人は、ポルトガル人に先んじてサントメ島にカヌーで着いた大陸アフリカ人の子孫だという説も語られたことを紹介している。



図3 アンゴラール語が語られる日常 (リベイラ・アフォンソの川辺) (2014.8)

母語話者自身は、自らの出自について、ポルトガル植民地時代に語られた言説を信じている傾向が強いことが、Nambongo (2003) による詳細な住民調査で明らかとなっている。では、アンゴラール語の現在の使用状況自体はどうであろうか。

まず、アンゴラール語が分布している、サントメ島南東部での使用状況は、私の普段フィールドワークしていることと比較すれば——あくまで比較の話であるが——私自身が現地で聞き取りをした現状では二つの意味で「危機化」はしていないと考えられる。

その2つとは、1つ目は、アンゴラール語の言語使用が非常に安定的で、フォロ語=サントメ・クレオール語やポルトガル語への安易なコード・スイッチングが起こっていないこと、2つ目は、コミュニティ自体の過疎化、高齢化が進んでいないこと。周縁地域の弱小少数言語をフィールドワークしていると、特に2番目の要件の重要さは痛感する。

こうした地域では、得てして、母語話者人口の磨滅をひきおこすのは、言語スイッチより人口流失が最大の要因になりがちであるからである。

しかしながら、決して楽観視できる状況にあるわけでない。それは、第一に、彼らが「消極的3言語話者」となっているからである。つまり、首都サントメ市中流階級の人々、つまりフォ



図4 サントメ島地図<sup>5)</sup>



ロの人たちの訪問を受けた場合にはフォロ語 (サントメ・クレオール語) で話し、首都の政治家や外国人観光客の訪問を受けた時にはポルトガル語となっている。首都サントメのフォロ話者住民がポルトガル語とのバイリンガルによるダイグロシヤ (二言語使用社会) で済んでいるのと比べて、近代に溺れてしまったシンプルな言語生活をする人間から一方的に判断すれば、それは場合によっては煩雑な言語状況なのかもしれない、ポルトガル語で受けざるを得ない教育の普及等によって、彼らがもっとシンプルな言語生活を望むようになる可能性は否定できない。実際、中等教育以上は首都サントメで受けねばならず、若者のアングラール語離れが指摘されている。

もう一つの危険性は自然災害である。急峻な火山島での漁撈生活は厳しい。大きく、波静かな漁港は望めず、いつがけ崩れや高波にコミュニティごと襲われるかもしれない。直接の被害はもとより、集団移住が言語絶滅につながる、ということもこうした弱小の言語コミュニティには充分起こりうることである。

いずれにせよ、サントメ島は、これだけ多様な言語、そして、4つ以上のクレオールが共存してきた、そして現在も共存している、稀有な言語・文化接触の場であることに違いなく、それが今後どのような推移をたどるのか、これらのことばがいかなる文化表象の題材として使われてゆくのかを含め、引き続き注視してゆきたい。

### 3. こじれる『チロリ』の起源

この論考をしめくくるにあたって、文学世界に分け入り、もう一つのクレオールとポスト・コロニアリズムの剥がれた接合面を、サントメ島に求めたい。このケースについては、Seibert (2009) による、史資料を渉猟し、細部に検討参照した優れた先行研究があるので、今回は以下彼の論考を再編成することとする<sup>(6)</sup>。

---

『チロリ』 *Tchiloli* は、サントメ島における文化活動のうち、最も重要であるとされている「演目」である。簡素な横笛を意味する『チロリ』は、ポルトガル語の通称の題名で、正式には *A Tragédia do Marquês de Mântua e do Imperador Carloto Magno* 『マントゥア侯爵とカルロト・マグノ皇帝の悲劇』という劇作であり、歴史スペクタクルである。作者は「ポルトガル語劇作の父」と呼ばれ、演劇の分野に限らず、全ヨーロッパの文学に影響を及ぼしたジル・ヴィセンテの次世代に当たる劇作家で、大西洋に浮かぶマデイラ島 (現在もポルトガル領で自治県) 出身のバルタザル・ディアス *Baltasar Dias* である。成立年代は1540年ごろ、ポルトガル人が種子島に到達する前夜のことである。盲目の語り部であったディアスは、南仏やイベリア半島のトロバドゥールたちによって語り継がれてきた物語の一つ——フランク王国カルロ大帝 (742 - 814年) の長子で、王太子の一人カルロト (「小カルロ」, 771年頃 - 811年) が、マントヴァ (マントゥア) 侯爵の甥である親友ヴァルデヴィノスの彼女を横恋慕した挙句、ヴァルデヴィノスを殺してしまうことから引きおこる、馬鹿息子をめぐる皇帝の苦悩と決断が軸となっている歴史絵巻——を悲劇に再構成した。ただし、それがリスボンで出版に具されるのは、1664年になってからで

ある。

プリンシペ島で行われる史劇 *O Auto de Floripes* 『フロリペスの聖史劇』と並んで、サントメ・プリンシペにおける「クレオール化演劇」の双璧とされる。

野外の仮設舞台で、ブラスバンドを従え、原作にダンスと唄で大幅に肉付けしておよそ6時間にわたって演じられる、とりわけ出し物として規模の大きい『チロリ』は、まさにアンゴラール語の「幻想的な起源説」が取り沙汰された1960年代以降、ポルトガル人、そしてヨーロッパ人によって「再発見」され、アンゴラール語と同じく、それがいつから行われているのかが議論となってきた。

最も素朴に見えて、その実は「ルーズ・トロピカリズモ」の銀の粉がまぶされた起源説は、言うまでもなく、ディアスが生きた16世紀にこの出し物がサントメ島に持ち込まれ、非識字のフォロたちによって、口承文学という方法で450年も連綿と演じられてきた、という「世界最長の口承文学」であるという立場である。まさにそうした視角から、この時代になって『チロリ』は注目されるようになる。

『チロリ』に最も早く言及した詩人、郷土史家フランシスコ・テンレイロ Francisco Tenreiro (1921-1963年)は、1961年、彼が記したサントメ島のモノグラフの中で、『チロリ』がサントメ島の住民にとって欠かせない娯楽であることを指摘しつつも具体的な起源を言及しなかった。一方で、サントメ出身の看護師でアマチュア民俗学者のフェルナンド・レイス Fernando Reis (1917-1992年)は、Reis (1969)において、16世紀、劇作が成立して間もなく、作者と同郷のマデイラの先駆的サトウキビ農家がこの作品を導入したに違いないと述べ、さらに『チロリ』は、この地のクレオールの民の数世紀にわたる生きた文化活動の証しであり、サントメ島におけるルーズ・トロピカリズモの勝利の証明を裏書きするものである」と昂揚しつつ結んでいる。彼の見立ては、ポルトガル人文化人、そして植民地政府官吏に手放しで受け入れられた。

しかし、この見方はまさに「ポルトガル熱帯主義」のバイアスのかかった甘美な幻影であり、実態はそうではない可能性が限りなく高い。

まず、演じられるセリフが、戯作者ディアスの原文でも、かといってフォロが普段しゃべるサントメ・クレオール語(フォロ語)でもない。19世紀に再版されたバージョンが、「なぜか」台詞になっているのである。

レイス説には重大なほころびがあることを示す傍証は他にも多くある。現在、『チロリ』を演じることを活動の中心とする演劇結社は10数組に上るが、組織化された最初の専門結社は、1935年10月に発足したものが最初である。ということは、それ以前はもっと素朴な形で演じられていた可能性が高い。もっと決定的なのは、1877年までに書かれたサントメ島に関するモノグラフ、紀行文、その他のいずれにも、『チロリ』に関する言及が存在しない。また、マデイラ人がサントメでサトウキビを栽培するのは15世紀のことであって、16世紀には、彼らサトウキビ農家の関心はブラジルの沃野に移っていた。ポルトガル王ジョアン二世からディアスが出版許可を下賜されるのは1537年になってから、しかも『チロリ』はその後に書かれた可能性が高い作品であって、いくら彼がマデイラ島出身であっても、16世紀のマデイラ農民がディアスの劇作を手を携えてサントメ島を訪れるのはあまりに不自然なのである。

こうした指摘は、実は Ambrósio (1985) を嚆矢として、主に演劇史研究者をはじめとする歴

史家によって指摘されてきたのであるが、観光局をはじめとするサントメ政府関係者のみならず、ポルトガル植民地史を鳥瞰しようとする文化史家、さらに欧州の文化人類学者からは、こうした議論にまるで気が付いていないかのように、徹底的に無視され続けている。

こうして、この説は再生産を繰り返し、現在においてもサントメの観光パンフレットはこれを踏襲し、果ては、1997年に、シルクロードをヒントに奴隷貿易への《反省》をベースに行うダークツーリズムの提案としてユネスコのポルトガル委員会が構成した「スレーブ・ロード」の重要な要素として取り込まれ<sup>(7)</sup>、さらにこれを踏み台にユネスコの世界無形文化遺産登録申請への動きさえある<sup>(8)</sup>。

著名なフランス人民俗演劇学者による Gründ (2006) は、この中でも最も問題のある著作である。

彼女は、『チロリ』を、ハーフ・ミレニアムに及ぶ不朽のクレオール文化の極致としてポルトガルではやった60年代の所説を無批判に受け入れ、誇張するばかりでなく、カロリング・ルネッサンスがここ南洋の辺鄙な小島にいまだに花開いている、という図式の、フランス古典主義の開陳を、多くの写真を素材にして描いてみせるのである。

---

以上、Seibert (2009) の冷徹な分析を紹介した。最後に紹介されている Gründ (2006) は、ポルトガル植民地主義とフランス植民地主義の残滓が輻輳したグロテスクな結合であるともいえる。

日本語環境の歴史研究、文学研究のアリーナにおいても、ポスト・コロニアリズムの共通理解のもと、欧米先進国——この場合スペインも含まれる——の植民地主義批判は掛け値なしで行われている感がある。しかしながら、ことポルトガルに関しては、植民地主義、特にそれが苛烈になったサラザール独裁体制下のルーズ・トロピカリズムへの牽強付会な理屈に、サンバやキゾンバ（リングラ・ポップをはじめとするアフリカ音楽とブラジル音楽の融合したジャンルで、発祥地のアンゴラおよびカーボ・ヴェルデの音楽シーンが牽引している）をまぶして陶酔する筋が少なからず残る。それは、詩人フェルナンド・ベソアの解釈にさえ及んでいる。

私は、それがすでに時代遅れで、反社会性をはらんでいるだけではなく、日本語環境で生きる人々のポルトガルの後進性への見下しからのゆがんだノブリス・オブリージュ感覚から来るものではないかとにらんでいる。

ここまで見てきたように、サントメ島をはじめとするギニア湾の小さな島々は、小粒ながら我々に訴えかけてくる、コントラストと多様性を従えているのである。

## 註

- 1) 出典：[http://en.wikipedia.org/wiki/Bight\\_of\\_Bonny#/media/File:Gulf\\_of\\_Guinea\\_\(English\).jpg](http://en.wikipedia.org/wiki/Bight_of_Bonny#/media/File:Gulf_of_Guinea_(English).jpg) [2015年3月16日閲覧]
- 2) 出典：<http://www.telanon.info/sociedade/2012/06/29/10732/sao-tome-e-principe-tem-187-356-habitantes/> [20150316]
- 3) これについては、従来作曲・作詞者に諸説あり、カーボ・ヴェルデの裁判所によって Armando Zeferino Soares の死の前年、2006年末によってようやく彼の作品であると裁定された。参考：<http://>

www.asemana.publ.cv/spip.php?article23465 [20150318]

- 4) Satre (2005), Higgs (2012) はこうした過酷な労働環境を明らかにしている。
- 5) 原図出典 : [http://static.dieweltuhrzeit.de/media/images/country\\_map/map\\_st.png](http://static.dieweltuhrzeit.de/media/images/country_map/map_st.png) [20150316 (一部筆者改変)]
- 6) Latitudes. Cahiers Lusophones. n° 36, Outubro de 2009, pp.16-20
- 7) カストロ・エンリケスが首班の Comité Português de “A Rota do Escravo” が発行する *Lugares de Memória da Escravatura do Tráfico Negroiro* 「黒人奴隷貿易を記憶する場」という配布物にクレジット無し  
の古い写真と共に紹介。
- 8) 2009年3月には実際、候補に挙がったが、現在まで選定されるに至っていない。

## 参考文献

- Alegre Costa, Francisco (2001) *Mussungú*, I, São Tomé: Instituto Camões/Centro Cultural Português em S. Tomé [=ICST]
- Almeida, António de (1956a) Contribuição para o estudo da antropologia física dos “angolares” (Ilha de São Tomé), *Actas da Conferencia Internacional dos Africanistas Ocidentais*, Vol. V, (6ª Sessão) Lisboa
- (1956b) Contribuição para o estudo da etnologia dos “angolares”, *Actas da Conferencia Internacional dos Africanistas Ocidentais*, Vol. V, (6ª Sessão) Lisboa
- (1962) Da origem dos angolares habitantes de São Tomé, *Memórias*, Academia das Ciências de Lisboa
- Almeida, António de, Maria Cecília de Castro (1957) Egoísmo castigado, fábula angolara, *Garcia de Orta*, 5 (2):319-325
- Ambrósio, António (1984) *Subsídios para a história de S. Tomé e Príncipe*, Lisboa: Livros Horizonte
- (1985) Para a história do Folclore santomense, *História*, 81:60-88
- (1992) O danço Congo de São Tomé e as suas origens, *Leba*, 7:341-372
- Araújo, Gabriel (2010) Relações entre as fonologias das línguas crioulas de STP e a ‘proposta ortográfica’ ALUSTP, *7º Congresso Ibérico de Estudos Africanos*, 9: 50 anos das independências africanas: desafios para a modernidade. Lisboa: CEA
- Araújo, Gabriel & Tjerk Hagemeyer (2013) *Dicionário livre do santome-português*, São Paulo: Hedra
- Bartens, Angela (2004) A Comparative Study of Reduplication in Portuguese- and Spanish-based Creoles, Mauro Fernández, Manuel Fernández-Ferreira & Nancy Vázquez Veiga (eds.), *Actas del III Encuentro de ACBLPE, Madrid: Iberoamericana/ Frankfurt: Vervuert*, 239-253
- Cadbury, William A. (1910) *Labour in Portuguese West Africa*, London: G. Routledge/ New York: E. P. Dutton
- Caldeira, Arlindo Manuel (1997) *Mulheres, Sexualidade e Casamento no Aquilpélago de São Tomé e Príncipe (Séculos XV a XVIII)*, Lisboa: Grupo de Trabalho do Ministério da Educação para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses [=CDP]
- (2000) *Viagens de um piloto português do século XVI à costa de África e a São Tomé*, Lisboa: Comissão Nacional para as CDP
- Caldeira, Arlindo (2004) Rebelião e outras formas de resistência à escravatura nas ilhas do Golfo da Guiné (séculos XVI-XVIII), *Studia Africana* 7:101-136
- Castelo-Branco, Fernando (1971) Subsídios para o Estudo dos “Angolares” de S. Tomé, *Studia*, 33:149-159
- Ceita, Maria Nazaré (1991) *Ensaio para uma Reconstrução Histórico-Antropológica dos Angolares de S. Tomé, Trabalho final do curso de pós-graduação em Desenvolvimento Social e Económico em África*, Lisboa, CEA/ISCTE
- Centro de Informação Amílcar Cabral (1979) *A Roça Rio de Ouro. Uma empresa agrícola nacionalizada em*



- São Tomé, Lisboa:CIDAC
- Cervelló, Sánchez Josep (1999) São Tomé 1953, A Matança de Batepá, *Ler História*, XXI:26-37
- Cristóvão, Fernando (coord.) (2005) Manifestações Culturais, Ritos de Passagem, Sítios e Referências de São Tomé e Príncipe, *Dicionário Temático da Lusofonia*, Lisboa:Texto editores, 696-698
- Cruz, Carlos Benigno do (1975) *S. Tomé e Príncipe – do Colonialismo à Independência*, Lisboa:Moraes Ed.
- Cunha Matos, Raimundo (1842) *Corographia Histórica das Ilhas de S. Thomé, Príncipe, Anno Bom e Fernando Pó*, Lisboa
- Daio, O. (2002) *Semplu*, S. Tomé:Edições Gesmédia
- Deus Lima, José (1993) *As Causas do massacre de 1953, Conferência sobre O Recordar da História do Massacre de 1953*, São Tomé, 2 de Fevereiro
- Dias, Gomes Alfredo e Augusto do Nascimento Diniz (1988) Os Angolares: da Autonomia à inserção na Sociedade Colonial, Segunda Metade do Século XIX, *Ler História*, 13:53-75
- Direcção Nacional da Cultura da República Democrática de São Tomé e Príncipe (1984), *Contos Tradicionais Santomenses*
- Espírito Santo, Carlos (2000a) *Almas de elite santomenses*, Lisboa:Cooperação
- (2000b) *Esperança, utopia e narcisismo nas literaturas africanas*, Lisboa:Cooperação
- (2003) *A Guerra da Trindade*, Lisboa:Cooperação
- Ferraz, Luiz Ivens (1974) A linguistic appraisal of Angolar, *In Memoriam Antonio Jorge Dias*, Lisbon:Instituto de Alta Cultura/Junta de Investigações Científicas do Ultramar, Vol. 2:177-186
- (1979) *The creole of São Tomé*, Johannesburg:Witwatersrand Univ. Press
- (1984) The Substrate of Annobonese, *African Studies*, 43 (2):119-36
- Francisco, Albertino da Boa Morte (2014) *Infraestruturação político-ideológica do estado são-tomense*, Cidade de São Tomé:19Express Editora
- Garfield, Robert (1992) *A History of São Tomé Island: 1470-1655:The key to Guinea*, San Francisco:Mellen Research Univ. Press
- Gründ, Françoise (2006) *Tchiloli : Charlemagne à Sao Tomé sur l'île du milieu du monde*, Paris:Magellan et Cie
- Güldemann, Tom & Tjerk Hagemeijer (2006) Negation in the Gulf of Guinea creoles: typological and historical perspectives, *ACBLPE annual meeting*, Universidade de Coimbra, June 26-28, 2006 [http://wwwstaff.eva.mpg.de/~gueldema/pdf/The\\_origin\\_of\\_negation\\_in\\_the\\_Gulf\\_of\\_Guinea\\_creoles\\_H.pdf](http://wwwstaff.eva.mpg.de/~gueldema/pdf/The_origin_of_negation_in_the_Gulf_of_Guinea_creoles_H.pdf) [20150311]
- Günther, Wilfried (1973) *Das Portugiesische Kreolisch der ilha do Príncipe*, Marburg: Marburger Studien zur Afrika-und-Asienkunde
- Hagemeijer, Tjerk (2003) A negação nos crioulos do Golfo da Guiné: aspectos sincrónicos e diacrónicos, *Revista Internacional de Lingüística Iberoamericana* 2:151-78
- (2011) The Gulf of Guinea Creoles: Genetic and Typological Relations, *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 26:1:111-154
- Hagemeijer, Tjerk, Michel Génèreux, Iris Hendrickx, Amália Pereira, Abigail Tiny, Armando Zamora (2014) The Gulf of Guinea creole corpora, N. Calzolari et al. (eds), *Proceedings of the 9th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC)*, 523-529. Reykjavik:European Language Resources Association
- Hagemeijer, Tjerk, Iris Hendrickx, Haldane Amaro, Abigail Tiny (2012) A Corpus of Santome, Workshop on Language Technology for Normalisation of Less-Resourced Language (SALTMIL8/AfLaT2012), 61-66
- Hagemeijer, Tjerk & Ogie, Ota (2011) Edo influence on Santome: evidence from verb serialization and

- beyond, Claire Lefebvre (ed.) *Creoles, their substrates, and anguage typology*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins, 37-60
- Henriques, Isabel Castro (2000) *São Tomé e Príncipe:A Invenção de uma Sociedade*, Lisboa:Vega.
- Higgs, Catherine (2012) *Chocolate Islands:Cocoa, Slavery, and Colonial Africa*, Athens:Ohio Univ. Press
- Hodges, Tony, Malyn Newitt (1998) *São Tomé and Príncipe. From Plantation Colony to Microstate*, Londres:Westview
- Holm, John (2007) Portuguese- & Spanish- Based Creoles and Typologies, *Papia* 16:53-61
- Jacobs, Bart (2009) The Upper Guinea Origins of Papiamentu. Linguistic and Historical Evidence, *Diachronica* 26:3:319-379
- Janz, G. Jorge, Luiz Garcia (1953) *Resultados de um Inquérito sobre o Estado de Saúde e Nutrição dos "Angolares" da Ilha de São Tomé*, Instituto de Medicina Tropical, 219-231
- Keese, Alexander (2011) Early Limits of Local Decolonization in São Tomé and Príncipe: From Colonial Abuses to Postcolonial Disappointment, 1945-1976, *International Journal of African Historical Studies*, 44:3:373-392
- Ladhams, John (2003) *The Formation of the Portuguese Plantation Creoles*. Unpublished PhD dissertation, Univ. of Westminster
- (2007) Article Agglutination and the African Contribution to the Portuguese-based Creoles <http://battlebridge.com/Blackwhite/ladhams.pdf> [20150311]
- Leite, Ilka Boaventura (2000) Os Quilombos no Brasil:Questões Conceituais e Normativas, *Etnográfica* , IV:2:333-353, Lisboa:Celta
- Lorenzino, Gerardo (1998) *The Angolar Creole Portuguese of São Tomé*, München /Newcastle:Lincom Europa
- Macedo, Fernando de (1984) *Para uma história dos "Angolares" de S. Tomé*, São Tomé e Príncipe
- (1996) *O Povo Angolar de S. Tomé e Príncipe*, S. Tomé, 3ª edição
- Mantero, Francisco (1910) *Mão d'obra em S. Tomé e Príncipe*, Lisboa
- Mata, Inocência (1998) *Diálogo com as Ilhas:Sobre Cultura e Literatura de São Tomé e Príncipe*, Lisboa:Edições Colibri
- Maurer, Philippe (1992) L'apport lexical bantou en angular, *Afrikanische Arbeitspapiere* 29:163-74
- (1995) *L'Angolar: un créole afro-portugaise parlé à São Tomé*, Hamburgo: Helmut Buske Verlag
- (2009) *Principense:Grammar, Texts, and Vocabulary of the Afro-Portuguese creole of the island of Príncipe*, Londres:Battlebridge Publications
- Michaelis, S, Maurer, P., Haspelmath, M. & Huber, M. (2013) *The survey of pidgin and creole languages, Vol. I:Portuguese-based, Spanish-based and French-based Languages*, Oxford Univ. Press
- Nambongo, Laurinda (2003) *Os angolares de São Tomé e Príncipe, Mito ou Realidade? Tentativa de Identificação Histórica e Sócio-Cultural, Tese de Licenciatura em Ciências da Educação, Instituto Superior de Ciências da Educação, Universidade Agostinho Neto, Lubango/Luanda*
- Nascimento, Augusto (2002) *Órfãos da raça:euopeus entre a fortuna e a desventura no S. Tomé e Príncipe colonial*, S. Tomé:ICST
- (2010) *História da Ilha do Príncipe*, Câmara Municipal de Oeiras
- Negreiros, António de Almada (1895) *Historia ethnographica da ilha de S. Tomé*, Lisboa:José Bastos
- Neves, Carlos Agostinho das (1989) *São Tomé e Príncipe na segunda metade do século XVIII*, Funchal:Região Autónoma da Madeira
- Pape, Duarte & Rodrigo Rebelo de Andrade (2013) *As roças de São Tomé e Príncipe*, Lisboa:Tinta-da-china Edições

- Pontífice, J. et al. (2009) *Alfabeto Unificada para as Línguas Nativas de S. Tomé e Príncipe (ALUSTP)*, São Tomé
- Post, Marike (1992) The serial verb construction in Fa d'Ambu", E. d'Andrade & A. Kihm (eds.), *Actas do Colóquio sobre Crioulos de Base Lexical Portuguesa*, 153-169 Lisboa: Colibri
- (1997) Negation in Fa d'Ambô, Ruth Degenhardt Thomas Stolz, Hella Ulferts (eds.), *Afrolusitanistik – eine vergessene Disziplin in Deutschland?*, 292-316 Universität Bremen.
- Quintas da Graça, A. (1989) *Paga Ngunu*, S. Tomé: Empresa de Artes Gráficas
- Ramos, Rui (1986) Rebelião e sociedade colonial: "alvorocos" e "levantamentos" em São Tomé (1545-1555), *Revista Internacional de Estudos Africanos*, 4 (5):17-74
- Reis, Fernando (1969) *Povo Flogá – "O Povo Brinca": folclore de São Tomé e Príncipe*, São Tomé: Câmara Municipal de São Tomé
- Ribeiro, Manuel Ferreira (1888) Dialecto da ilha do Príncipe, *MS* no. 11.23.12, Schuchardt Archives of the University of Graz, Austria
- Santos, Catarina Madeira (1996) A formação das estruturas fundiárias e a territorialização das tensões sociais: São Tomé, primeira metade do século XVI" *Studia*, 54/55:51-91
- Satre, Lowell J. (2005) *Slavery, Politics, and the Ethics of Business*, Athens: Ohio Univ. Press
- Schuchardt, H. (1882) Kreolische Studien I. Über das Negerportugiesische von S.Thomé. *Sitzungsberichte der kaiserlichen Akademie des Wissenschaften zu Wien*, 101, II:889-917
- Seibert, Gerhard (1998) A Questão da Origem dos Angolares de São Tomé, *CeSA* 5, Lisboa: Instituto Superior de Economia e Gestão [=ISEG], Universidade Técnica de Lisboa.
- (2005) A Verdadeira Origem do Célebre Rei Amador, líder da revolta dos escravos em 1595, *Piá*, 26:10-11, São Tomé e Príncipe.
- (2005) *Naufregos, autóctones ou cimarrones?: O debate sobre a Origem dos Angolares de São Tomé*, Centro Cultural Português, ICSTP
- (2006) *Comrades, Clients, and Cousins: Colonialism, Socialism and Democratization in São Tomé and Príncipe*, Leiden and Boston: Brill
- (2007a) António de Almeida e os caminhos errados da antropobiologia em São Tomé, *Blogue História Lusófona* <http://www2.iict.pt/?idc=102&idi=12300> [20150311]
- (2007b) Angolares of São Tomé island, P. Havik & M. Newitt (eds.), *Creole Societies in the Portuguese Colonial Empire*, Bristol Univ. Press, 105-126
- (2009) Carlos Magno no Equador - A introdução do "Tchiloli" em São Tomé, *Latitudes: Cahiers Lusophones*, 36=2009.10.:16-20
- Shaxson, Nicholas (2008) *Poisoned Wells: The Dirty Politics of African Oil*, London: Palgrave Macmillan
- Tenreiro, Francisco (1961) *A Ilha de São Tomé*, Lisboa: Junta de Investigações do Ultramar
- Tiny, Kiluange (2002) *Pingos de Um Amanhecer Feliz*, São Tomé e Príncipe, ICST
- Tomás, Gil et al. (2002) The peopling of São Tomé (Gulf of Guinea): Origins of Slave Settlers and Admixture with the Portuguese, *Human Biology*, 74:397-411
- Valverde, Paulo (2000) *Máscara, Mato e Morte em São Tomé*, Oeiras: Celta
- Vogt, John (1973) The early São Tomé-Príncipe Slave Trade with Mina: 1500-1540, *International Journal of African Studies*, VI (3):453-467

